

日本語中級文型を使った上級レベル学習者の短文作成練習と フィードバック

— 複文・文脈処理をより円滑に行う取り組みとして —¹

鈴木美加

キーワード：上級学習者、中級文型、短文作成課題、教師フィードバック、処理可能性理論

1. はじめに

本稿は、日本語上級レベルの学習者が受講した中級文型復習・応用の授業で作成した文型短文の特徴を示し、上級レベルにおける中級文型の復習・応用の機会提供の有効性に関する検討を行うものである。研究の背景として、これまでに、①日本語能力試験 N2 までの文型が的確に使える能力が、アカデミック・ジャパニーズ能力として重要であり（山本 2005a、山本 2005b、佐藤 2005）、その能力が学部での勉強および卒業後も含めた基礎となること、②中級以降の文型についての体系化がまだ不十分であり（前田 2007、山本 2019）、学習項目に関する情報は、さまざまな教材、教科書、学習サイトから得られるものの、類似表現との異なりや、文脈における適切な使用が可能になるような情報の獲得、運用における活用は、コース提供側あるいは学習者自身に任されていること、③学部進学予備教育課程の上級学習者に対する中級復習授業での文型復習・応用の活動について、多くの学習者がアカデミックな日本語運用力を上げるために有用だと回答したこと（鈴木・後藤 2021）がわかっている。

ここでは、実際に学習者が中級復習・応用を行う授業で作成した短文例を挙げるとともに、言語習得のレベルを予測する処理可能性理論（Pienemann 1998）にもとづく峯（2015）の日本語の処理の発達段階を参考に、短文産出における処理についての分析、検討を試み、上級レベル学習者の学びの一端を確認する。また、文型確認の際の文脈活用の可能性についても言及する。

2. 日本語学習におけるレベル記述と言語項目

日本語学習者を社会的存在として捉え、国内外での「日本語の習得段階に応じて求められる日本語教育の内容・方法を明らかにし、外国人等が適切な評価を受けられるようにするために」、文化庁はヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR；Council of Europe 2001）を参照し、A1～C2 レベルの記述文が収められた「日本語教育の参照枠」（以下、「日本語参照枠」）を公開した（文化庁 2021）。CEFR も「日本語参照枠」も言語行動が Can-do の形式で記されている。そのうち、言語使用者の「能力」記述として、言語能力（linguistic competences）、社会言語能力（sociolinguistic competences）、

¹ 本稿は、東アジア日本研究者協議会大会パネル「日本語教育における『文型』あるいは Formulaic Sequence を考える」で行った発表「日本語上級学習者と文型短文作成：『中級』授業での文型短文作成練習とフィードバック」（発表者 鈴木美加、レディン・ケヴィン）の鈴木美加発表担当部分に大幅に加筆修正を行うとともに、構成を変更し、まとめたものである。

言語運用能力 (pragmatic competences) の3種に関連づける形で、「使用語彙領域」、「文法的正確さ」、「音素の把握」、「正書法の把握」、「社会言語的な適切さ」、「発言の順番」、「話題の展開」、「話し言葉の流暢さ」、「叙述の正確さ」などについての記述文が示されている。本稿で焦点を当てる「文型」の運用はこれらと関係し、各言語レベルの Can-do が、どのような語や文法と対応するかを示すような profile リスト (根岸 2012 など) と関連づけて捉えることができる²。英語教育分野では、2010年頃から学習者データをもとに、語や文法項目の CEFR レベルとの対応づけがなされている。関連の調査研究をもとに、根岸 (2012) は、言語学習者にとって、母語にはない文法項目 (例 定冠詞、不定冠詞) が正しく使えるようになるまでにかかなりの年月がかかることを述べ、石井 (2016) は、英語学習者の言語使用データをもとに、英語の過去進行形 (肯定平叙文) の使用が B1 レベルで、助動詞+完了の項目 (肯定平叙文) が B2 レベルで増えていることを明らかにしている。また Green (2012) は just の複数の意味機能の使用には、A2 から C1 までの幅があることを示している。日本語教育では、日本語能力試験を基準にした語や文法事項のレベル表示が一般的だが、上記の profile (根岸 2012) のように、言語でどのような行動がとれるかを示す言語レベルと、語や文法項目の対応づけに関する調査研究はまだわずかである³。

第2言語習得論の研究においては、第2言語学習者の各発達段階で処理可能な項目 (群) を予測しようとする処理可能性理論 (processability theory; Pienemann 1998、峯 2015) がある。峯は日本語の文について、南 (1995) の「日本語の階層構造」を取り上げ、日本語の文構造の4つの階層 (A～D類) の区分を、言語処理の発達段階と対応づけた検討を行っている。句の処理は、A類 (描述)、即ち「～カラ～ニ／ト、～ヲ」+「動詞+ (サ)セル+ (ラ)レル」で構成される動詞句の産出に必要な処理とし、A類より大きいB～D類の文単位の処理は「文処理」、複文あるいは前後の文脈が処理に影響を与える場合は「複文・文脈処理」として、言語産出にかかる処理負担を分析している⁴。文全体、あるいは複文・文脈に影響される文法項目の産出は、句レベルの処理よりも負荷がかかるとされる。処理可能性理論を踏まえると、上記の根岸 (2012) のいう英語の定冠詞、不定冠詞の別に長い期間がかかるという現象も、適切な産出には文あるいは文脈に合わせた使用が必要になるためであろうと思われる。また、日本語上級学習者による論文に見られた誤りが90%以上初級レベルのものであったという高梨他 (2017) の調査結果も、「は」と「が」の選択上の問題など、このような処理レベルの負担に起因するものも見受けられる。学習者の産出データをもとに、処理の階層を確認し、処理上の負担を分析することにより、文法事項の詳細な検討が可能になると言えよう。なお、処理可能性理論では、口頭発話の分析を基本としているが、本研究では記述された短文作成を対象にするため、処理の負荷やプロセスについては違いが生じると思われるが、このことを分析にあたり、留意することとした。

² 根岸 (2012) は、profile リストとして、A Core Inventory for General English (North, B. 他 2010) と English Profile (Cambridge University Press 2015) を紹介している。その中で、文法事項の例として日本の中学校で学ぶ英語の passive は両者ともに CEFR B2 と C1 に位置づけていることを述べている。

³ 参考になる例として、東他 (2012) は、CEFR B1 学習者の「のだ」の使用について調査分析を行うとともに、モダリティ表現指導について検討している。

⁴ 峯 (2015) では学習者発話例「日本人はアメリカのどこから来たかについて聞いて (日本人にアメリカのどこから来たか聞かれて)、アメリカ人じゃありませんから、困っていました」を示し、短文を超えた視点の統一のために受身文にする必要があり、これは複文・文脈処理を要する言語形式だとしている (p.219)。

3. 上級学習者対象の中級文型復習・応用の授業概要

本節では、上級学習者が中級文型の短文作成を行った「中級総復習」授業の概要を示す。ここでは、2022年度授業について述べる。授業の対象者は、本学留学生日本語教育センター国費学部進学予備教育課程在籍の日本語レベルCEFR B2程度の学生であった⁵。本稿で取り上げる「中級総復習」授業は、主に、中級文型の復習・応用を行うことが目的となっていたこと⁶から、本稿では、以下、「中級文型復習・応用」の授業と呼称する。中級文型復習・応用の授業は、週1コマ14週行われ、同時期に並行して、プロジェクト型の総合授業（週5コマ）、技能型授業（聴解・口頭表現・文章表現；週4コマ）も開講された。

中級文型復習・応用の授業は全14回で、中級文型の復習のため、東京外国語大学留学生日本語教育センター著『中級日本語（上）』『中級日本語（下）』を使用し、文型・語句全299項目⁷のうち、授業では重要な項目を取り上げ、確認した。各回、対象文型の意味機能をもとに文型の整理を行い、対象文型が使用される文脈（フォーマリテイや文体など）の違いや似た文型の使い分けなどの確認、文完成練習なども行った。毎回の授業の流れは、①予習として、学習者が各自教科書の文型・語句の確認、本文読み（内容理解）、本文中の語彙・漢字の確認を行う、②授業で、該当課に含まれる文型のポイントの確認、短文完成練習ワークなどを行い、文型の意味機能の確認と適切な産出に向けた練習をする、③授業後に復習課題として、文型を使用した短文作成課題（学習チェックシート；図1）⁸を行う、という形式で進めた。

本授業の内容および方法に関する学習者の反応については概ね好評で、授業期間半ばで実施したアンケートで、学習者は、本授業教材や課題のうち、自らの日本語の知識やスキルとの対応で最も役に立つ教材として、短文作成課題（学習チェックシート）が選択された⁹。日本語能力試験N1の合格者も多く、学習済みの項

中級総復習 学習チェックシート L6~L7

学籍番号[] 氏名[]

L6 チェック問題

① 教科書 p.47-50 のうち、次の文型を使って、自分のオリジナルの文を一つずつ書きましょう。

~ということだ/（~のことだ）

~と言われている

~...~のは、そのためである

~うちに、（わかって）きた

L7 チェック問題

① 教科書 p.58-64 のうち、次の文型を使って、自分のオリジナルの文を一つずつ書きましょう。

~ことは~が、...

~は...ほどではない

~おかげで、...（~せいで、...）

② 「使役受身形」p.63 と「使役形+てもらう」をつかって、自分のオリジナルの文を一つずつ書きましょう。

図1 文型復習用提出課題シート例

⁵ 研究協力の承諾を得た学習者21名のデータを分析対象とする。この数は全受講学生の9割以上であった。

⁶ 学期初めに、学習目標として、①日常生活およびアカデミック場面において円滑なコミュニケーションが成り立つように、『中級日本語』に出現する文法、語彙、文字すべての言語要素について、適切に使用できるかの確認を行い、十分定着していない要素について自信を持って使えるようになること、②中級レベルの文章の文法や語彙の使い方について分析できるようになること、とし、学習者と教師が確認した（鈴木・後藤 2021）。本授業は、鈴木・後藤（2021）で報告した授業内容と概ね共通するが、開講コマ数が異なる。

⁷ 『中級日本語（上）』『中級日本語（下）』では、日本語教育で一般に文型とされる項目のうち、主に句レベルの文型を「語句」として取り上げており、「文型・語句」は、日本語教育における「文型」とみなすことができる。

⁸ 学習チェックシートは、学習文型の短文作成課題のほかに、授業目標の自己チェックや質問、コメントを記述する項目もある。

⁹ アンケート形式の質問（Google Formにより2022年5月26日実施）において、学習者は授業使用教材や課題で役に立つ教材として、①学習チェックシート 95.2%、②授業用PPT動画 85.7%を選択した（複数回答形式）なお、本授業期間前半はコロナ禍の影響により、非対面オンライン形式授業を実施した。

目も多かったとみられたが、学習者は学習済みの文型をさらに発展的に学ぶことができていると判断された。

授業での活動例として、論の根拠を示す際の2つの文型「～.というのは、…(からだ)」と「なぜなら…(からだ)」を確認する際に使用した文章を図2に示す。授業(第8回)では、該当課(13～14課)全21文型のうち、13文型を扱った。意味機能ごとに文型を整理し、それぞれの意味機能や使い方の確認、文完成練習を行った後に、発展ワークの形で図2の文章を扱った。発展ワークでは、対象文型「というのは」(第14课文型4)とその類似表現「なぜなら」について、文章2種を読み、2つの文型の使われる文脈の違いについて検討する活動を行った。「なぜなら」を知っていても、「というのは」を学んでいない学習者もあり、因果関係を示す文型でも、文脈を通して、自らの主張の根拠を示すのか、ある事象の判断・評価とその根拠を示すのか、といった違いが用例の読み込みによって理解、実感されるようである。

例1←

2021年の熱波は重大な影響をもたらした。シーズン終了時、市内のトマト生産者による収穫量は、予定よりも10%ほど少なかった。さほど大きな数字には思えないかもしれないが、これは大変なことだ。なぜなら、カリフォルニア州は米国産の加工用トマトの90%を生産しているからだ。10%程度の減少であっても、ピザ用ソース、パスタソース、ケチャップなどの原料となるトマトを供給する缶詰業者は窮地に立たされた。…←

<インターネット記事一部>https://www.kousendo.jp/smartphone/businessblog/2501_2022-07-21_07-00-00.html←

例2←

本書は、格差社会を生み出した主たる原因としての労働問題にメスを入れたものであり、←
「労働研究者に特徴的なアプローチによる格差社会論の試み」とされている。しかし、著者の方法は、必ずしも、
「労働研究者」一般に「特徴的なアプローチ」だとは言えない。というのは、著者の格差社会批判は、まず、労働における「階層性」の確認から始まっているからである。「産業社会がいつもある意味で階層社会だったこと」「恵まれている程度による階層性というものが、分業システムのなかにはいつも免れがたくあるということ」は、著者の議論の前提とされている。←

しかし、ここで著者は、それぞれの階層間の関係に着目する。…←

<<http://e-kyodo.sakura.ne.jp/igarashi/kumasawa.pdf>>より←

書評 五十嵐 仁、熊沢 誠著『格差社会ニッポンで働くということ—雇用と労働のゆくえをみつめて』←

図2 授業シート一部抜粋(論の根拠「～.というのは、…」と「～.なぜなら…」)

4. 学習者作成短文例とその特徴

中級文型復習・応用の授業の復習として、毎回短文作成課題の提出が課された。この課題は該当課の中級文型約10項目について、学習者が自由に短文を作成するものであった¹⁰。本節では、以下、4つの文型を使用した学習者作成の短文の例を示し、その特徴を確認する。

¹⁰ 2020年度担当者2名(後藤・鈴木)のうち、後藤が上級レベル学生に対する課題として、自由産出の短文作成課題を提案、学習者が熱心に取り組んでいることから、それ以降も、この形式を採用している。

4-1 使役受身形

使役受身形（第7課文型12）を取り上げる回に、「使役形+てもらう」（第12課文型15）も合わせて短文作成を課した。4-1では、使役受身形の短文を挙げる。

- (1) 体育の授業で毎回グラウンドを10周走らされる。(205)¹¹
- (2) お腹がいっぱいなのに、友達が作った料理を食べさせられた。(212)
- (3) 体重が一気に増えて、医者に行ったらダイエットを始めさせられた。(219)
- (4) 自分の長所について話させられる場面は恥ずかしくて苦手だ。(201)
- (5) 明日まで報告書を出させられたが、仲間に手伝ってもらってどうにか終わらせた。(202)
- (6) 母親に野菜を食べさせられた子供のすねた顔は可愛かった。(215)
- (7) アルハラ、つまり強引的に酒を飲まされる行為は日本だけではなく、各国での社会問題になっている。(216)

(1)～(3)は行為を強いられた状況がよくわかる文である。(4)は面接などで遭遇する状況下の心理状態を説明する短文で、素直な心情の表現から作成者の人の好きを感じさせるような、読み手の共感を呼ぶ文である。(5)は翌日までの期限で報告書の提出が求められた状況とその対応を示す。「明日まで」は「明日までということ」に変えれば適切な文となる。期限を指定した側の伝達であることの明確化が求められ、峯(2015)の処理のレベルでは「複文・文脈処理」が必要な短文である。(6)(7)は、使役受身の動詞句が名詞節を構成する要素になっており、2文ともに「複文・文脈処理」が適切になされている。

本稿では協力者すべての作成文の掲載はしていないが、どの文も使役受身形の誤用はなかった。また、教科書の文型例文は、主に初級後半までの語彙使用による簡潔な文（各例文17～24字）であり、中級初めの段階の学習者が理解できることを重視した例文設定となっている。今回の学習者作成短文は、教科書例文より長めで、中～上級の語も含まれるが、状況設定がわかりやすい文が多く、作成者の意欲やチャレンジ、オリジナリティも感じられる。話題は、個別の状況あるいは経験を記す文がほとんどだが、被害を受ける側に立った社会的な事象の叙述文も見られる。

4-2 使役形+てもらう

- (8) 宿題は手書きで提出させていただきます。(206)
- (9) 決心を見せて親を説得した結果、やっと留学に行かせてもらった。(215)
- (10) 生まれた赤ちゃんの養育のために、上司から一定期間休業をさせてもらった。(216)
- (11) 彼のライン以外の連絡先を知らなかったなので、彼の友達の携帯電話で電話させてもらい、彼と連絡を取ることができた。(217)
- (12) 時間が切れていたが、先生にテストを終わらせてもらいました。(218)

「使役形+もらう」についても、協力者すべての作成短文について、使役形そのものの形の誤用はなかった。短文については、恩恵を自分に与えてくれる相手の判断あるいは、その結果の自らの行為が読み手に明確に伝わらない文も見られた(12)。

¹¹ 文の終わりに、データ化した際に付した学習者番号を示す。

(9) は行為の結果を自然なもの、あるいは当然の帰結として示す際、「もらう」を可能形にするなど、動詞部分を無意志性に変える必要がある文である。(12) は、「時間が切れていた」を「時間切れになっていたが／なってしまったが」などに、後件を「テストの最後の問題まで回答させてもらいました」とすれば、書き手の意図が読み手に通じるであろう。4-1 の使役受身文より、相手とのやりとりを経て、あるいは、相手からの恩恵を受けて、最終的な結果に到達したことを示す必要があることから、(9) ～ (12) の処理は、峯 (2015) の複文・文脈レベルの処理であると言える。4-2 の作成短文は、すべて個別の経験、状況を記す文であり、これは「もらう」の意味特性によるものであろう。

4-3 「～に基づいて／基づき」

「に基づいて／基づき」(第10課文型1) は、根拠となるデータを示し、行為を行う／行ったことを述べる複合助詞であり、前に来る名詞の種類が限られると同時に、後に続く動詞も、名詞とのつながりが明白な行為であるという制約がある。

- (13) ハチ公物語という映画は実話に基づいて描かれた。(210)
- (14) キャラクターの人気投票の結果に基づき、グッズが制作された。(201)
- (15) インターネットで調べた情報に基づいて発表の原稿を書く。(215)
- (16) 地図に基づいてスーパーまで行くことができました。(208)
- (17) アンケート結果に基づいて、商品の問題点を絞り出すことができた。(216)
- (18) 歴史は事実に基づいて評価すべきだ。(202)

上記に示した短文は、一般的な事象、個別の経験、意見の叙述がなされており、話題もさまざまである。(13) (14) とともに設定がわかりやすく、親しみを感じさせる短文である。(15) は行為動詞を「まとめる」などにするとさらに自然な文になる。(16) は根拠・基盤となる「地図」が「スーパーまで行く」という行為と明白につながるとは感じられないため、違和感が生じるが、行為が「アプリを開発する」であればスムーズな文となり、「地図に基づいて開発されたアプリを使って、(行ったことのない) スーパーまで行くことができました。」であればよくわかる。(17) は行為として、「分析する」のであればよく伝わり、「基づいて」の後に、「分析を行い、商品の問題点を絞り込むことができた」であれば問題ない。(18) は、「ある歴史上の事件に関する記述」「歴史における〇〇氏の功績」など、その名詞句によって、評価の具体的な対象が明示されれば、読み手にインパクトを与える文になろう。どの短文も、「何に基づくか」「その結果、何がなされるか」を示す内容となり、言語処理レベルは複文・文脈処理と言えるであろう。「に基づいて」の前に来る名詞句、後につく動詞(行為)の条件に合った文とする必要がある。

峯 (2015) では、「に基づいて」のような複合助詞を直接分析の対象にはしていないが、従属節の分類を3種に分け、処理の複雑性について言及している。従属節は、①客観的な階層(A類; 「ながら(同時)」「て(付帯状況)」、②主観的な階層(C類; 「から」「て(並列)」など)、③客観的な階層(A類)と主観的な階層(C類)の中間的な階層(B類; 「たら」「ば」「ので」「て(理由・継起)）」という3種に分けられ、A類、C類、B類の順に複雑な処理になるとしている。この3種の分類は、複合助詞の含まれる文の処理にも適用できるのではないかと考えるが、「に基づ

いて」は①A類の「て(付帯状況)」と共通する性質を持つと思われるものの、前後にくる名詞句や動詞句に制限があることから、処理の負荷が重くなるのかもしれない。

4-4 「～傾向がある／傾向にある」

「～傾向がある」(第16課文型7)の復習、確認を行う回には、「傾向にある」(『中級日本語』での掲載なし)も合わせて確認している。

- (19) 日本人は過剰包装の傾向がある。(209)
- (20) 日本人は宗教について話したがらない傾向がある。(211)
- (21) 最近の若物は容易く退社してしまう傾向がある。(214)
- (22) 男性は、ジムで上半身をしか鍛えない傾向がある。(216)
- (23) 最近の日本における若者は政治に無心である傾向がある。(201)
- (24) 日本人は漢字をよく使うので、中国語を学びやすいという傾向がある。(204)
- (25) 最近、途上国もデジタル化の傾向にある。(218)
- (26) 最近の人々の多くがストレスに弱い傾向にある。(208)
- (27) 最近ベトナムにおいて車を持つ人が増えていく傾向がある。(206)

「～傾向がある」「～傾向にある」の文型の意味機能を的確に理解できていることが伝わってくる文が多い。(24)は「傾向がある」を使わずに、「中国語を学びやすいと感じることが多い」「中国語を学びやすい言語だと感じるだろう」ということが多いだろう。(27)は変化に一方向性が見られ、また、最近の状況を示すので「ていく」は使わずに、「増える傾向にある」とすると伝わる。語彙や漢字の間違い¹²を除くと、(19)～(27)のどれも作成者の意図がよくわかる短文となっており、社会的な状況、変化の説明が明確に述べられていることがわかる。文構造としては、(19)、(25)が単文であり、それ以外は複文である。処理レベルは(19)は文処理、(25)も単文だが、副助詞「も」により、前提あるいは前の文の存在を感じさせることにより、複文・文脈処理と捉えても良いと思われる。そのほかは、複文・文脈処理といえる。複文・文脈処理ではあるものの、この2種の文型は、文産出時にそれほど処理負担は重くないのではないかと推察される。

以上、4節で確認した学習者作成短文の特徴をまとめておく。

- ・ 作成者自らの経験や考えが、文型の枠組みに則って、具体的なイメージや心理的な状況も伝わる味わい深い文が示されているものが多く見られた。
- ・ 中級の文型そのものの形式は産出に問題がないが、自らの経験や思考、社会事象をもとにしたユニークな短文を作る際には、軽微な誤りが生じることもある。
- ・ 句レベルでは、文字表記、語の取り違いを除き、間違いはほとんどない。
- ・ 文・複文レベルで、項目の前後に来る名詞の範疇、動詞のモダリティ、アスペクトなどに一部誤用が見られる。誤用の要因は母語、あるいは、処理負担によるものか、それぞれの誤用についてのさらなる分析が必要である。

¹² 漢字表記の誤りは「若物」(⇒「若者」)、語の誤りは、「無心」(⇒「無関心」)、「退社」(⇒「退職」)である。

- ・ 学習者によっては、作成短文の伝達意図が読み手にうまく伝わらない文を産出していることもある。

5. 作成短文に対する教師フィードバック

本節では、主に学習者の短文作成課題に対して行った教師フィードバックの方針とフィードバック例を示す。さらに、デジタル技術の進展による今後の可能性についても検討を加える。なお、授業時間の制約により、学習者間のピア・フィードバック活動などは行わなかった。

5-1 教師フィードバックの方針

中級文型復習・応用の授業では、学習者作成短文課題に対して、主に2種のフィードバックを提供した。学習者作成短文とそれに対するフィードバック例を図3に示す。

○正誤と修正情報の明示

正しい文は◎とした。書き手の学習者の伝達意図を推測し、誤りや不明な部分には、意図に沿った適切な言語形式、表現を示すとともに、その理由もできるだけ示した。間違いではないが、グレーゾーンは△で、より伝わる／使われる言い方を示すこととした。

○学習者の動機づけに関わる要因への配慮

工夫された短文や努力の跡が見られる文は、授業担当者が素直に感じた一言を入れるようにし、誤用が含まれていても、その工夫や努力の素晴らしさについてコメントした。

(例 状況設定がよくわかります！)

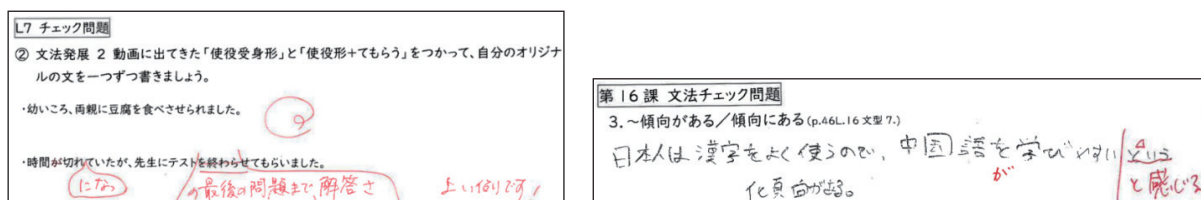


図3 学習者短文と教師フィードバック例：非同期オンライン授業（A）と対面授業（B）での課題と教師フィードバック

5-2 教師のフィードバックの対応と今後

教師が行った短文課題に対するフィードバックの効果については、まだ不明な点が多い。課題シートなどで教師フィードバックが役に立つことをコメントした者も複数おり、中級復習授業全般に対する学習者の評価が概ね高いことから、役に立つと感じている学習者が多いと推察される。教師フィードバックが役に立っているとすれば、学習者に対する気づきや、学習項目のよりの確かな近いに結びつけるための機会が提供できているのではないかと思われる。学習者に理解可能かつ簡潔なフィードバックを提供するために、時間を要するが、学習者と授業担当者とのコミュニケーションの1つとすれば、重要な機会と位置づけられる。

日本語の文としての自然さや適切さについてのゆれは、学習者の言語レベルが上がると特に対応に慎重を要する。これまでは主にインターネット検索で用例を確認することで対応しているが、さらに有用な情報や活用できるコーパス（用例を含む）は求められるであろう。現在の技術の進

展とともに、AI などによる校正や添削も、ある部分自動化¹³ の方向に進むことが予想される。そのような技術活用と合わせ、教師の役割も変わる可能性がある。学習者の理解を包括的に捉え、情意面への配慮も含めたフィードバック情報をマクロな視点から提供する、あるいは、技術活用も組み込んだ学習の場の設定を行うなど、多面的な対応が必要となるのではないかと考える。

6. おわりに

本稿では、上級学習者対象に行った中級文型復習・応用の授業で、学習者が作成した中級文型の短文例を挙げ、処理可能性理論を援用し、その処理に関する検討を試みた。文型作成課題は、該当課の文型を使うという前提を設定しているため、学習者が短文を作るプロセスは、日常のコミュニケーションで、話者が思いついた伝えたいメッセージを言語化して伝える順序（プロセス）とは異なっていたが、ほとんどの学習者は負担を感じず、肯定的に課題に取り組み、その文型の特徴をよく把握した短文の産出を行うことができていたこと、また、複文・文脈処理を要する場合に処理負担によって誤用が生じやすくなることが推察されることが確認された。教師フィードバックも概ね学習者の学びを助けるものであったと推測するが、今後丁寧に分析したいと考えている。今後の技術の進展とともに、短文作成練習およびフィードバックのより効果的なやり方も考案可能になっていくと思われ、中級文型の情報の整備¹⁴も視野に入れ、進めたいと考える。

付記

本研究の一部は、科学研究費補助金基盤研究（A）「大規模日本語定型表現抽出と構造分析による帰納的文法再構築及び日本語教育への応用」（芝野耕司代表、課題番号 20H00096）、東京外国語大学科研費等外部資金獲得支援研究費（共同研究枠）「日本語上級学習者作成短文データによる中級文型・語彙の活用可能性と教師フィードバックの分析」を得て実施した。

本研究遂行にあたり、学習者学生短文の使用許諾をいただいた本学留学生日本語教育センター予備教育課程上級学習者の皆さん、データ化作業をしていただいた東京外国語大学総合国際学研究所博士後期課程コウイハンさんにお世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 東伴子・櫻井直子（2012）「CEFR B1 レベルの産出活動におけるモダリティ表現」『Japanese Language Education in Europe 17: Workshop on Japanese language education utilizing CEFR and JF standard for Japanese-language』ヨーロッパ日本語教師会 pp.59-66
- 庵功雄（2023）「日本語学的知見から見た中上級シラバス」『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 石井康毅（2016）「英文中の文法項目頻度調査のための項目選定と英文からの抽出法—CEFR-J の枠組みでの研究—」『社会イノベーション研究』11, 2, pp.107-122
- 小林雄一郎・石井雄隆（2019）「英語ライティング指導のための自動フィードバックシステムの開発に向けて」日本大学生産工学部研究報告 B, 52, pp.7-15
- 佐藤正光（2005）「学部教育におけるアカデミック・ジャパニーズを考える」『移転記念シンポジウム—アカデミック・ジャパニーズを考える—報告書』東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 鈴木美加・後藤倫子（2021）「アカデミックな言語活動を支える日本語『中級総復習』のオンラインクラス

¹³ 英語ライティング指導の自動フィードバック研究の例として、小林・石井（2019）がある。

¹⁴ 庵（2023）は日本語学的知見から、コーパス4種の分析に基づき、中上級シラバスを提案しており、詳しい分析、検討も望まれる。

- 一上級日本語学習者に対する指導と支援—』『東京外国語大学国際日本学研究』1, pp.143-156
- 高梨信乃他 (2017) 「上級日本語学習者に見られる文法の問題：修士論文の草稿を例に」『阪大日本語研究』29, pp.159-185
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2020) 『中級日本語 (上)』凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2018) 『中級日本語 (下)』凡人社
- 根岸雅史 (2012) 「英語の CEFR 参照レベル記述のための2つのアプローチ:Core Inventory と English Profile Programme」『科学研究費補助金 基盤研究 B 研究プロジェクト報告書「EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」』 pp.23-30
- 文化審議会国語分科会 (2021) 『日本語教育の参照枠 報告』令和3年10月12日付 <https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf> (2023年11月20日閲覧)
- 前田直子 (2007) 「中級・上級の日本語文法教育」『研究年報』学習院大学文学部 53, pp.71-93
- 南不二夫 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 峯布由紀 (2015) 『第二言語としての日本語の発達過程：言語と思考の Processability』ココ出版
- 山本忠行 (2019) 「言語による価値創造を目指して (4) —中級日本語教育の教材と指導法をめぐって—」『通信教育部論集』22, pp.16-36
- 山本富美子 (2005a) 「アカデミック・ジャパニーズに求められる語彙知識とは—2-4 級語彙・文法事項の重要性—」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ (2)：日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究—国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに— 科学研究費補助金基盤研究 (A) (1) 報告書』(平成14年度～16年度、課題番号14208022、代表者門倉正美) pp.110-126
- 山本富美子 (2005b) 「アカデミック・ジャパニーズに求められる能力とは—論理的・分析的・批判的思考法と語彙知識をめぐって—」『移転記念シンポジウム—アカデミック・ジャパニーズを考える— 報告書』東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.1-6
- Cambridge University Press (2015) English Profile: The CEFR for English <<https://www.englishprofile.org/>> (2023年11月20日閲覧)
- Council of Europe (2001) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment. Cambridge: Cambridge University Press. (吉島茂／大橋理枝他訳・編 (2014) 『外国語教育 II 追補版 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)
- Green, A. (2012) English Profile: The Common European Framework for English English Profile: Reference Level descriptions for English, British Council <<https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/pro-ee-tonygreenplenaryppt-en.pdf>> (2023年11月20日閲覧)
- North, B., Ortega, A. and Sheehan, S. (2010) Core Inventory for General English, British Council/EAQUALS <https://www.eaquals.org/wp-content/uploads/EAQUALS_British_Council_Core_Curriculum_April2011.pdf> (2023年11月20日閲覧)
- Pienemann, M. (1998) Language processing and second language development: Processability theory. Amsterdam: John Benjamins.

(すずき みか 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)

Advanced Learner Practice and Teacher Feedback on Writing Short Sentences for Intermediate Japanese Sentence Pattern Revision: Facilitation of Processing at the ‘Compound Sentence/Context’ Level

SUZUKI Mika

KEYWORDS: advanced-level learners, sentence patterns in intermediate Japanese, short sentence production tasks, teacher feedback, processability theory

This paper describes the characteristics of short sentences using intermediate sentence patterns produced by advanced level Japanese language learners and examines the effectiveness of providing opportunities for review of intermediate sentence patterns at the advanced level.

The background of this study is as follows: (1) the ability of learners to use sentence patterns up to N2 of the Japanese Language Proficiency Test is important as an academic Japanese skill (Yamamoto 2005a, Yamamoto 2005b, Sato 2005), and this ability is the basis for both undergraduate studies and postgraduation activities, (2) the systematization of sentence patterns after intermediate level is still insufficient (Maeda 2007, Yamamoto 2019) and it is up to course providers or learners themselves to acquire and use information that enables them to differentiate expressions that are similar and use them appropriately in the appropriate context, although related information can be obtained from various materials, textbooks, and learning websites, and (3) most advanced students in the intermediate review class in the pre-college course have indicated that the review and application of sentence patterns was useful for improving their academic Japanese (Suzuki and Goto 2021).

In this paper, some aspects of short sentences using intermediate sentence patterns produced by advanced level learners were investigated while analyzing the level of the learners' process enabled them to produce sentences in rich and appropriate contexts, as described in Mine's (2015) developmental stage level of processing, which is based on the processability theory that predicts the level of language acquisition. Based upon analysis, it was found that (1) the sentences were rich and vivid in context including the learners' experiences and thoughts; (2) although the learners had no problems understanding and producing intermediate-level grammar patterns, they made minor errors when producing unique sentences, and (3), as processability theory describes, it was shown that while there were few errors at the clause level, with the exception of spelling and minor word confusion, some misuses were found at the sentence and compound sentence level, such as the modality and the aspect of verbs, and the categories of nouns that come before or after certain patterns.

In summary, short sentences using intermediate sentence patterns produced by advanced learners suggest the applicability of processability theory in SLA and further analysis in this area is expected. Utilizing the findings and taking advantage of technological advances, a systematic analysis based on macro-level teacher feedback will be required in the future.